

タイトル: 基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」平成 24 年度第 3 回公開セミナー

日時: 平成 24 年 6 月 19 日(水曜日) 午後 6 時 00 分より午後 8 時 00 分

会場: AA 研マルチメディア会議室(304)

報告者: 深澤秀夫氏(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 教授)

報告タイトル: アフリカ研究入門「インド洋の中のマダガスカル～マダガスカル人の起源からマダガスカルの独立まで～」

共催: AA 研基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」(代表: 深澤秀夫)

報告要旨: 別紙参照

*当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.



インド洋の中のマダガスカル

マダガスカル人の起源からマダガスカルの独立まで
2012年 6月19日 アフリカ文化 第3回 公開セミナー

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
深澤 秀夫

マジュンガ北西部の村の子供たち 同一民族でも形質が極めて多様である

自称詞を持たなかった島人の歴史

＜マダガスカル＞と言う名称は、16世紀にマダガスカル島を「発見」したヨーロッパ人たちが、マルコポーロの『東方見聞録』に記載されている＜モグダシオ＞と同定したことに由来するとも、あるいは当時マダガスカル島南部にあった＜マスタカシ＞と言う王国名に由来するとも言われる。その名称の由来は別として、この名称によってマダガスカルの島を名指しはじめ、また名指してきたのはもっぱらヨーロッパ人たちである。

当のマダガスカルの島に住む人びとは、19世紀初頭にイメリナ王国の王が、イギリスから＜マダガスカル王＞と言う名称を授けられまたそれを名乗るまで、自分たちを指す自称詞を持たなかった。イメリナ王国も、当初はマダガスカルの島とそこに住む人びとをteto anivon'ny riaka、すなわち＜海の中の(われわれ)＞と呼んでいた。

このように自称詞を持たなかった人びとが、マダガスカル共和国を形成するまでには、千数百年有余の歴史が介在する。

歴史的視点のポイント

- 1.) マダガスカルの歴史時代区分およびその名称については、フランス植民地化以前と以後、植民地期と独立以降の区分以外、確立した学説がない。
- 2.) マダガスカルの歴史研究者の多くが中央高地のメリナ系(Merina)出身者であること、19世紀に全土の三分の二近くに影響力を及ぼしたこと、残された文書史料の質と量における偏りから、イメリナ(Imerina)王国を中心とした歴史記述に偏重する傾向が顕著である。
- 3.) 研究者の数および残された史料の制約から、地方史記述の視点および方法も確立されていない。



マダガスカル人の起源

アジア・アフリカ・アラブ三つの系統

歴史的視点のポイント

アジア・アフリカ・アラブの形質的また文化的影響は、マダガスカル全土のあらゆる人びとや民族に、その強弱はあるにせよ、等しく見出されること。すなわち、現在、アジア、アラブ、アフリカの歴史的な系統は、マダガスカル人を構成する文化的要素に変異している。

✕ 誤り「Tandroyの人びとはアフリカ系、Merinaの人びとはアジア系、Temoroの人びとはアラブ系」。

⇒マダガスカルに住む人びとは過去千有余年の間に、島内における移動と混血を繰り返してきている。

⇒この島に住む人びとが、自分たちは＜マダガスカル語＞を話す同じ＜マダガスカル人＞と考えに至るのは、20世紀に入ってからである。



アジアの系統

Majunga北西部地方の人びとがIRIの品種を刈り取っているところ

アジア系の人びとの移住

1.) マダガスカル人のアジア起源と移住について、正確な年代、経路はわかっていない。年代と経路は、言語学・民族学・農学・考古学・歴史学などの知見を総合した、仮説ないし推論の域を出ない。

2.) マダガスカル島が、今から2000年ほど前まで無人島であったことはほぼ間違いがない。この島に最初にたどり着いた人びとが、アジア系であったか否かは不明である。しかしながら、現在のマダガスカル人の言語的また文化的な共通性を与えた最初の移住者たちが、アジアからの人びとであった蓋然性は極めて高い。

3.) アジア系の人びとのマダガスカルへの移動は、おそらく5～8世紀頃から13世紀～14世紀頃までの間に、複数回生じている。

南方モンゴロイドの形質

出典:H.Deschamps, *Histoire de Madagascar*, 1972, Berger-Levrault 出典:P. Vêrin, *Madagascar*, 1990, Karthala



南方モンゴロイドの形質

現代首都アンタナナリヴの住民



オーストロネシア語族としてのマダガスカル語

意味	オーストロネシア系言語	マダガスカル語
石	bato	vato
月	bulan	volana
土・土地	taneh	tany
火	apui	afo
ヤムイモ	uvy	ovy
ココヤシ	nijuy	nio
木	kajo	hazo
子供	anak	zanaka
腸	tinai	tsinay
手	tanana	tanana
鳥	bulung	vorona

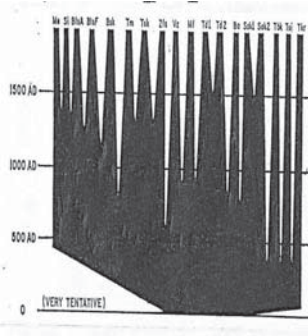
*マダガスカル語は、台湾、ニュージーランドやハワイの先住民、フィリピン・インドネシア・マレーシアなどの人びとと同じ、**オーストロネシア語族**（マラヨ-ポリネシア語族）に属する言語。

*マダガスカル語には、バンツー語族ないしスワヒリ語起源の語彙が多く見られるものの、アフリカ大陸の言語とは、別系統の言語。

出典: Dahl, Otto Chr., *Malgache et Maanjan*, 1951, Oslo: Egede-Instituttet

オーストロネシア語族としてのマダガスカル語の共通性

言語年代学に基づくマダガスカル語各方言の分岐年代の測定



*マダガスカル語の共通性は、19世紀のイメリナ王国の覇権の拡大以前に成立。

*マダガスカル語には、方言が存在するものの、相互に通話は可能。

*言語年代学の測定によれば、マダガスカル語の各方言は、5世紀頃に一つとなる。

出典: Verin, P., C.P.Kottak and P.Gorlin, the glottochronology of malagasy speech communities, *Oceanic Linguistics* vol.8 no.1 1969, p.68

稲作と関連技術

焼畑稲作における点播 (Fenoarivo地方)



東海岸の焼畑で用いられる陸稲はジャワニ力種である (Fenoarivo地方)



稲作と関連技術

生育中の焼畑陸稲 (マジュンガ北西部地方)



焼畑耕作準備地 (マジュンガ北西部地方)



稲作と関連技術

棚田耕作 (Ambositra地方)



棚田耕作 (Ambositra地方)



稲作関連技術

踏耕 東南アジアの島嶼部で見られる田ごしらえの方法 (Ambatondrazaka地方)



踏耕 マダガスカル各地で行われている (Manakara地方)



稲作と関連技術

牛犁を用いた耕起と散播 (マジュンガ北西部地方)



散播+かけ流し水田 (畔がつくられていない マジュンガ北西部地方)



稲作と関連技術

谷地水田 (Manakara地方) における移植

この地方に移植法が導入されたのは、フランス統治後の20世紀以降。



低地水田 (マジュンガ北西部地方) における移植

この地方に移植法が導入されたのは、<緑の革命>導入後の1970年代後半。



稲作と関連技術

高床式の米倉 南東部海岸地方



高床式の米倉 (東海岸地方) 穂刈された穂が貯蔵されている。



米食の世界

ご飯 (vary) とおかず (laoka)
(Ambatondrazaka市内の現地食堂)

雑炊 (vary amin'anana)
(Ambatondrazaka市内の現地食堂)



19

米食の世界

祝い事における共同の米搗き (マジュンガ北西部地方)

祝い事における共同の炊飯 コメの大量消費 (マジュンガ北西部地方)



20

稲作技術系統の複数性

1.) マダガスカル＝稲作・米食＝アジアの伝統、と結びつけて語られることが多い。しかし、マダガスカルに最初にやって来たアジア系の人びとが、稲作技術を携えていたか否かは不明。

- 2.) マダガスカルにおける稲作には、**3つの異なる技術系統**がある。
- 焼畑＋陸稲＋点播＋穂刈り/打ち付け脱穀
 - 水田＋水稲＋踏耕/鋤耕＋移植＋根刈り＋打ち付け脱穀
 - 水田＋水稲＋踏耕＋散播＋根刈り＋牛蹄脱穀

これら複数の技術系統は、異なる地域からの人びとが、異なる年代にマダガスカルに稲作を持ち込んだことを示している可能性が高い。

3.) 「**稲作以前**」の段階の農耕を想定する必要がある。その時の重要な農作物は、バナナ・ヤムイモ・タロイモ・ココヤシ・サトウキビなど。

21

マダガスカルにおける稲作の歴史的展開

- 1.) 10世紀から12世紀頃、新しくやって来たインドネシア系集団もしくは「アラブ＝イスラム」系集団が、島の北西部から北東部にはじめて稲と稲作をもたらした。
- 2.) それらの人びとの島内での移動に伴い稲作は、ヨーロッパ人たちが島に来た16世紀までに、東部海岸一帯と北西部海岸一帯に普及した。
- 3.) 中央高地に居住していたメリナ系の人びとが、東部海岸ないし北西海岸から稲と稲作を受け、王を頂点とする政治統合を基盤に大規模公共土木工事を行い、16世紀頃から水田稲作を急速に発展させた。
- 4.) 18世紀までに稲作は、年間降水量800ミリを下回る島の南西部から南部一帯を除いて、広く行われる様になり、牛や奴隷とともにマダガスカルからの海外との主要な交易品となった。
- 5.) 19世紀のイメリナ王国の島内各地の征服に伴う領土の拡張とメリナ系の人びとの入植は、灌漑稲作法を各地に普及させた。
- 6.) 20世紀には、「植民地の平和」の許で東南海岸部に住み人口の増加圧を生じていたアンタシ系やアンタイサカ系の焼き畑耕作民の人びとが、土地を求めて人口の希薄だった西部から西南部一帯に移住をはじめ、それに高地のベツイレウ系の人びとも加わってこの地方での稲作が進み、ほぼマダガスカル全島を稲作の風景が覆うようになった。

出典：J.F.Bourdier, *L'homme et le paysage du riz à Madagascar*, 1976.

22

稲作以前

プランテーションバナナ (マジュンガ北西部地方)

東部地方におけるバナナに対するfontysと言ふ名称は、オーストロネシア語起源。



サトウキビ (マジュンガ北西部地方) このほかにもタロイモおよびココヤシ・ヤムイモを、稲作以前に持ってきた可能性が高い。



23

稲作以前

タロイモとタロイモの茎
(Moramanga市内の市場)



ヤムイモとヤムイモの葉

(Moramanga地方 Bezanozanoの人びと) ヤムイモに対するovyと言ふ名称はオーストロネシア語起源。



24

道具

双胴のふいご (Majunga北西部地方)
東南アジアとマダガスカルにしか見られない。



吹き矢と筒 (Majunga北西部地方)
マダガスカル・東南アジア・南米にしか見られない。



25

道具

モノアウトリガ型カヌー
出典: *Madagascar ultimo gondwana*, 1976, Erizzo, p.115

インド洋・東南アジア島嶼部・太平洋に分布。



26

竹琴

出典: *valiha madagascar*, radio france

マダガスカルおよび東南アジアの一部大陸から島嶼部にしか見られない。



改葬・二次葬

Tsimihetyの人びとのfamokarana



Betsileoの人びとのfamadihana
出典: 堀内孝「マダガスカル風土記」『季刊民族学』72号 1996年



27

言語学・民族学・農学などから見たアジア系の人びとのマダガスカルへの移住の概要

- 1.) 5～8世紀頃、焼畑農耕の技術を携えた最初のアジア系の人びとがマダガスカル島にやって来て定住する。
- 2.) その後10世紀頃までに、アジア系の人びとのマダガスカル島への移住が複数回生じ、海岸部一帯に居住域を拡大する。稲作や鉄器製造の技術が伝えられると共に、オーストロネシア語を基礎とする「地域間共通言語」(リンガフランカ)としてのマダガスカル語が成立する。
- 3.) 13世紀～14世紀頃、北東部のAntongile湾に、最後のアジア系の集団が上陸する(推計では200人くらいの規模)。この集団がその後内陸部を移動し、現在のMerina, Sihanaka、北部Betsileoの人びとの母集団を構成する。

28



アンテムルの人びとと港町マジュンガ

出典: H.Deschamps, *Histoire de Madagascar*, Paris: Berger-Levrault, 1972



30

アラブ系の人びとの移住

- 1.) インド洋交易は紀元1世紀に存在した一方、アラブ系の人びとがインド洋の交易などに進出してきたのは、イスラーム教成立の8世紀以降とされる。
- 2.) アラブ系の人びとが何時頃マダガスカルにやって来たのかについても、年代は明確ではない。
- 3.) **中世インド洋交易網が確立した比較的古い年代(12世紀～15世紀頃)に、東南部から南東部にアラブ系の集団が数次にわたり到着したものと推定されている。また、16世紀頃からは、コモロ諸島を介しマダガスカル西岸とアフリカ東岸との間に、アラビア交易網が確立されていた。**
- 4.) <アラブ系>と言っても、形質的にアラビア人であったか否か、またアラビア半島出身か否かも明確ではない。東アフリカ沿岸のスワヒリ社会と同様に、マダガスカルにもペルシャを起源地と主張するシラジ系の人びとの移住伝承が存在する。おそらく、<アラブ系>の集団は、マダガスカルにやって来た当初はイスラーム教を保持していたものと推測される。

31

アラブ系の人びとの移住

- 5.) 当初はイスラーム教を奉じていたと推測される集団も、マダガスカルに到着後、次第にその信仰形態が変質し、アラブの習俗や起源を伝承する集団として、土着化していった。
- 6.) <アラブ系>の人びとがマダガスカルに与えた影響には、下記のようなものがある。
 - 6-1. アラビア文字を用いたマダガスカル語表記法とその文書スラベ(sorabe)。
 - 6-2. **製紙技術** ⇒ 商品化されたAntaimoro紙。
 - 6-3. **暦** ⇒ マダガスカル語の曜日名はアラビア語起源。
 - 6-4. **占い術** ⇒ Sikidy占いと占い暦。
 - 6-5. **割礼** ⇒ Antambahoaka系の人びとの割礼祭sambatra ⇔ イメリナ王国の割礼祭。
 - 6-6. 「王」や「王国」の観念?
 - 6-7. 盤上ゲームkatra(マンカラ)

32

ダウ船

ダウ船(マジュンガ市内)
ダウ船は、インド西海岸からアラビア半島・アフリカ沿岸まで、かつてのアラビア交易網の地域で広く見られる。

ダウ船と国内航路の港(マジュンガ市内)現在はマダガスカル国内の航路のみで使用されているが、かつてはこの船でコモロや東アフリカ沿岸まで航海を行い、交易をしていた。近年ダウ船は、激減している。



33

スワヒリ系建築様式

独特の格子状の門扉
(マジュンガ市内)



独特の装飾の施された門扉
(マジュンガ市内)



34

スワヒリ系建築様式

マジュンガ市内の国内航路港の近辺には、建築から百年以上を経過したスワヒリ系建築様式の家が何軒か見られた。これはその内の1軒の廃墟。現在完全な形で保存されている家屋は、ほとんどない。

サンゴや石を積み上げ、サンゴもしくは石灰岩を焼いて砕いた粉末を水に溶いて結合剤とする。暑さとサイクロンへの対策のため窓を小さくしてあることも特徴で、平屋だけではなく、二階家や三階家の構造となっているものもあった。



35

スワヒリ系建築様式

マジュンガの国内航路港近くの路地。

スワヒリ系建築の廃墟の隣の家と向かいの家は、比較的近年ブロックで建てられたものであるが、この一角だけは往年の建築の様式と路地の佇まいを、比較的良く保持している。

マダガスカルにおいては、歴史的文化的財の保護や保存は残念ながら極めて遅れている。



36

スラベ (sorabe)

出典: ed. Par Françoise Raison-Jourde, *Les Souverains de Madagascar*, 1983, Paris: KARTHALA.

右は、南東部のAntemoroの人びとの間で採取されたスラベ手稿の原典。占いの方法が、記されている。スラベは、アラビアから伝えられた製紙技術に基づいて作られた紙に書かれている。もともとは、文字も製紙法も『コーラン』を書き記すために伝承されていたものと思われる。現在発見されている写本は、王族の年代記ないし占いのやり方に関する内容である。アンテムルの人びとの間で口伝されている、現在でも秘匿されているく本当のスラベとは、『コーラン』である可能性も否定できない。

このスラベの書記法は、18世紀にイメリナ王国でも採用され、ラダマ1世の書いたスラベ文書も遺されていた。



37

南東部に居住する焼畑稲作—水田稲作民 Antemoro系の人びとにおける階層制

参考資料: H. Deshamps et S. Vianès, *Les Malgaches du Sud-Est*, P.U.F., 1959.

王族 (Anteony): Antemoro王国を創設したと言われるRamarohala王の子孫たち。Anteonyとは、その一族名。Ramarohala王の祖先は、マッカからマダガスカルにやって来たとの伝承を保持する。

占い師 (Antalaoatra): Antalaoatraとは、オーストロネシア語族由来の単語で、<海人>を意味する。Ramarohala王の祖先と共にマッカからやって来た伝承を持つ複数の親族単位の総称であり、Temoro王国内部では、占い師、祝儀、書記などの職能を果たす。

Onjatsy: Anteony一族よりも先にAntemoroの地にやって来た。アラブ起源の伝承を持つ一族の名称。平民の一族よりも優越する地位を持つ。

平民 (Ampanabaka): Menakely, Fanarivoanaの名称でも呼ばれる。多数の親族単位から構成される。19世紀に起きた平民集団と王族集団との内戦の結果、Antemoro王国としての統一性は、現在失われている。

奴隷 (Antevo): アラブからの移民の連れてきた奴隷従者、戦争捕虜などから成る。兵隊の役割を担った人々も居たが、家内使役奴隷が多かった。この階層出身者との婚姻は、忌避されている。

不可触民 (Antevolo): 一説ではその先祖が犬との獣交を行ったためと言われるが、この一族がなぜ差別されるのかは定かではない。Temoro系の人びとの階層中、最下位に位置づけられ、Antevolo所属の女性との婚姻はおろか、いかなる接触も強く忌避される。さらに、Antevoloに属する人間が、他の階層の人間の村に居住することや家屋内に立ち入ることも禁止される。

38

Antemoro系の人びと

大衆において正統した王>

出典: B. Chandon-Moet, *Vohimasina Village Malgache*, 1972.

Antemoro族の村で水汲みに行く少女たち
出典: Rombaka, *fomban-drazana antemoro*, 1970, fianarantsoa: ambontany.



製紙技術 (Antaimoro紙)

Ambalavao市内にあるマシューズ工房
工房の入り口



Ambalavao市内にあるマシューズ工房
Antaimoro紙の原材料となる木の繊維



40

製紙技術 (Antaimoro紙)

Ambalavao市内にあるマシューズ工房

東南部のAntaimoro(もしくはAntemoro)の人びとの間で伝承されてきた製紙技術を基に、植民地時代にマダムMatheuがAmbalavao市内に工房を作り、商品化したもの。生花を漉き込むことは、この時から行われるようになった。

原料の木の皮の繊維を水につけてふやかした上で、臼で搗き、さらに木の槌で細かく粉砕し、カンバス布の上に敷いた簾に一定の厚さに漉く。その後、生花を載せ、さらに繊維の入った糊の液を上から塗布し、乾燥させる。



41

Sikidy占い

(マジュンガ北西部地方)

アラビア地方から伝えられた占い方法。イスラーム教と直接には関係ないが、マダガスカルにやって来たイスラーム・アラブ系の集団が持ち込んだことは間違いない。17世紀に出版されたFlacourtの『マダガスカル博物誌』にも、その記述が見られる。

マダガスカル全土で広く見られる占い方法であるが、その解読方法はたいへんに複雑。



42

現代マダガスカルの イスラーム教徒

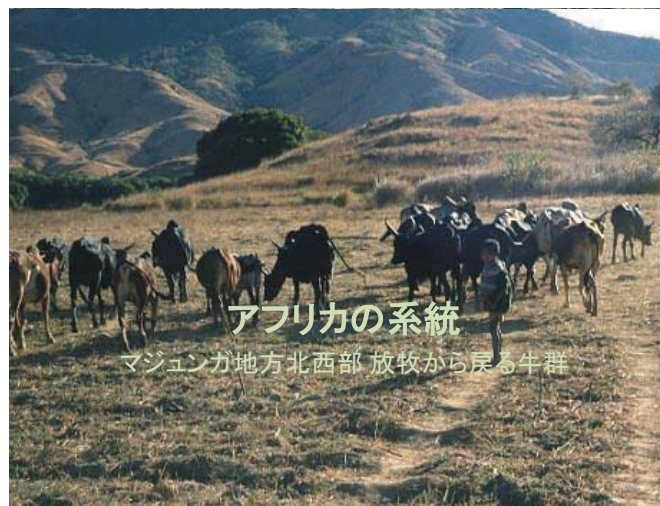
現代マダガスカルの都市部で目にするモスクは、19世紀以降にマダガスカルに渡ってきたインド・パキスタン系の人びとやコモロ系の人びとの礼拝施設である。

右は、マジュンガ市内にあるコモロ系の人びとのモスク。



現代マダガスカル人のイスラーム教徒は、北部のAntakaranaの人びとやAntemoroの人びとの一部などに限られている。マダガスカルの宗教統計で<イスラーム>に分類される人びとの多くは、上記のインド・パキスタン系およびコモロ系の人びとである。宗教上、現代マダガスカル人の半分以上がキリスト教徒であることはまちがいない。

43



アフリカの系統

マジュンガ地方北西部 放牧から戻る牛群

アフリカ黒人の形質

アフリカ的形質の優勢なマダガスカル人のタイプ

出典: *Bulletin de madagascar*, no.137, 1957

アフリカ的形質の優勢なマダガスカル人のタイプ マジュンガ地方北西部



45

アフリカから渡来した栽培作物

ヒョウタン(マジュンガ地方北西部) ヒョウタンにはアフリカ系とアジア系があり、マダガスカルには両系が存在する。このほかにも、ゴマ・スイカ・ウリはアフリカから渡来したものと推定される。



モロコシ(ampemba)
(アンタナナリヴ地方)



アフリカの道具

投石器(マジュンガ北西部地方) 投石器(スリング)は、アフリカ・中近東・東アジア・南米に広く分布



47

熱帯牛の牧畜と使役

搾乳

(マジュンガ北西部地方)

牛乳と乳製品が栄養摂取に占める割合は小さい。



牛車の牽引獣

(マジュンガ北西部地方)

牛を農耕や牽引に使用することは、アジアの伝統と共通する。



48

熱帯牛の牧畜と使役

牛蹄脱穀

(マジュンガ北西部地方)



49

蹄耕

(マジュンガ北西部地方)



牛の供犠

牛を供犠する前の司祭による唱えごと(マジュンガ北西部地方)



改葬において屠った牛の頭を木の杭にかけているところ(マジュンガ北西部地方)



50

牛をめぐる表象

家の壁に描かれた牛の絵
(マジュンガ北西部地方)



Aômbilahy tanimanga
(マジュンガ北西部地方)



51

牛をめぐる表象

mitolon'omy(マジュンガ北西部地方)



52

憑依儀礼

tromba(マジュンガ北西部地方)
霊が霊媒に憑依したところ。



tromba(マジュンガ北西部地方)
霊媒が相談者の質問に答えているところ。



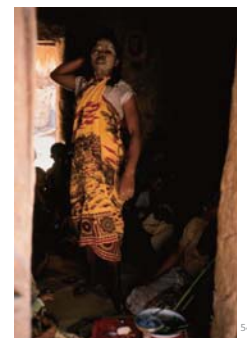
53

憑依儀礼

tromba(マジュンガ北西部地方)
霊が霊媒から離れ、介添え者が気づけをしているところ。



tromba(マジュンガ北西部地方)
霊が霊媒から完全に離れたところ。



54

アフリカ系の人びとの起源をめぐる謎

アジア系、アラブ系の人びとのマダガスカル島への移住以上に、アフリカ系の人びとのマダガスカル島への移住には謎が多い。アフリカ系の人びとの起源ではっきりしているのは、18世紀から19世紀に対岸のアフリカ大陸からアラブ商人やヨーロッパの交易船によって奴隷として連れてこられた人びとである。

その人びとだけが、マダガスカルにおけるアフリカ系の人びとの起源でないことは明らかである。その一方、アフリカ大陸とマダガスカル島はその最も近いところで400kmしか離れていないものの、モザンビーク海峡は北上する海流が強く、それなりの航海技術が必要である一方、マダガスカルの対岸に居住するバンツー系民族は農耕民か農耕牧畜民であり、このような航海技術を有していない。そのため、マダガスカルの人と文化に見られるアフリカの影響は、マダガスカルの地ではなく、アフリカ大陸側で生じたとする学説も見られる。

また、マダガスカルの歴史を研究はMerina系の人びとが中心となって推進されてきた結果、彼らはアジアとの歴史的なつながりを究明することには熱心であったが、アフリカとの歴史的なつながりを探求することにはあまり熱心ではなかったと言う研究をめぐる文化的背景も影響を与えている。

55

地域間共通語(リンガフランカ)としてのマダガスカル語の成立 1

*マダガスカル語には、オーストロネシア語族以外の言語を起源とする単語が多く含まれている。

*マダガスカル島に最初に定住した東南アジアからのオーストロネシア系言語を持つ人々の言葉が、そのまま現在のマダガスカル語になったわけではない。

出典: RAZAFINTSALAMA, *La Langue Malgache et Les Origines Malgache*, 1928, Tananarive: Imprimerie Moderne de l'Emyme

意味	マダガスカル語	語源となった言語
牛	omby	スワヒリ語
鶏	akoho	スワヒリ語
犬	amboa	スワヒリ語
土鍋	nongo	スワヒリ語
金曜日	Zoma	アラビア語
首長・社長	tale	アラビア語
蝶	lolo	サンスクリット語
池	farihy	サンスクリット語
給料	karama	サンスクリット語
猫	saka	フランス語
豚	kisoa	フランス語
カレンダー	alimanaka	英語

地域間共通言語(リンガフランカ)としてのマダガスカル語の成立 2

a. 5~8世紀頃、東南アジアからオーストロネシア系言語を話す人びとが最初にマダガスカル島に移住してきた後、アフリカ・アラビア・インドなどからも人びとがやって来た。

b. 東南アジアからのオーストロネシア系言語を持つ人びとの移住も、13世紀~14世紀頃まで複数回に渡って行われた。

c. 異なる地域から移住してきた異なる言語を持つ人びとの間で、最初に定住し人口の上で多数派を占め、居住面積も広がった東南アジアからの移住者たちが用いていたオーストロネシア系言語を基に、**地域間共通言語(リンガフランカ)**として、現代のマダガスカル語の基層を成す言葉が、10世紀頃までに成立したと推測される。

57

ヨーロッパ人來島以前のマダガスカル

- 1.) オーストロネシア語族に属する相互に理解可能な言語を話す人びとが、全島に居住していた。
- 2.) 焼畑陸稲作もしくは水田水稻作の農耕技術、鉄器の製造技術、牛の牧畜が、かなりの地域で普及していた。
- 3.) 一部の地域で<王国>の形成が始まっていたが、sorabeを除き識字の能力が普及していなかったため、文書史料はほとんど残されていなかった。
- 4.) また、アジア・アフリカ・アラブの形質的また文化的混濁が、マダガスカルの地で主として生じたのか、それとも経由地のアフリカやコモロで生じたのかは不明。
- 5.) アジア系、アラブ系、アフリカ系の人びとが、何時頃どの地域にどれくらいの人数でどのような経路と移動方法でやって来たのかもほとんど不明。

58



マジンガ市内にあるSakalava王国の王墓(doany)

ヨーロッパ人のマダガスカル進出の試み

1500年 ポルトガル人による、マダガスカルの<発見>。

オランダ: 16世紀後半~17世紀半ば 北東部のAntongil湾に基地を建設。
イギリス: 北東部のAntongil湾や南西部のSt. Augustin湾で交易。
フランス: 1643年~1674年 南部にFort Dauphin砦を建設。

フランスのFort-Dauphin砦建設は、1686年に國務院によるマダガスカルの一時的な併合宣言、ひいては19世紀のフランスによるマダガスカル進出の国家的な根拠として利用される。しかしながら、17世紀後半には本国の事情やマダガスカル人社会との軋轢により、フランスをはじめ全てのヨーロッパの国々が、マダガスカルにおける拠点形成の試みからほぼ撤退する。

17世紀後半から18世紀前半、マダガスカルにおけるヨーロッパ国家権力の<真空地帯>の出現は、インド洋におけるヨーロッパの海賊たちを招きよせることとなる。その長大な海岸線は、海賊たちに船の隠れ家と出撃拠点およびサイクロンからの避難場所を提供した。キッド船長のような実在の人物から、海賊共和国リベリアを建設したとされるミュッソンのような創作説の高い人物までおり、その実像は必ずしも明らかとはなっていない。しかしながら、Diego-Suarez湾からSaint-Marie島の一帯を根拠に、17世紀後半から18世紀前半にかけ、相当数の海賊たちが、インドや東南アジアを行き来するヨーロッパの商船、あるいはインド洋を行き来するメッカ巡礼者の乗った船などを襲撃したことはほぼ間違いない。また、一部の海賊は、コモロ島におけるスルタンの継承争いに介入し、歴史に名を残している。

60

16世紀末南西部地方の住民と動植物

出典: ハウトマン『東インド諸島への航海』 岩波書店 1981年(1597年)



16世紀末南西部地方のマダガスカル住民

出典: ハウトマン『東インド諸島への航海』 岩波書店 1981年(1597年)



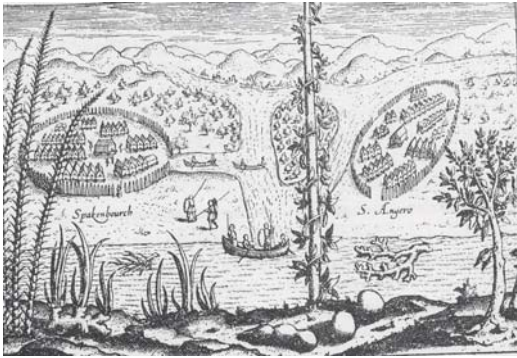
16世紀末北東部アントンジル湾地方のマダガスカル住民

出典: ハウトマン『東インド諸島への航海』 岩波書店 1981年(1597年)



16世紀末北東部アントンヅル湾内に建設されたオランダの拠点

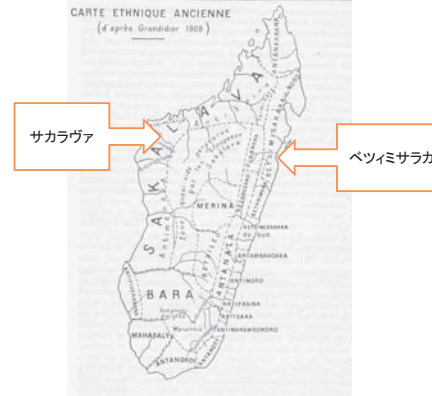
出典:ハウトマン『東インド諸島への航海』岩波書店 1981年(1597年)



64

ベツィミサラカとサカラヴァ

出典:H.Deschamps, *Histoire de Madagascar*, Paris: Berger-Levrault, 1972



65

海賊の系譜に連なるBetsimisaraka王国

このようなヨーロッパの海賊の男性たちがマダガスカル人の女性との間にもうけた子孫のことを、zanamalata、すなわち「ムラートの子孫」と呼ぶ。<ムラート>とは、中南米などにおいて白人と黒人の混血時を指す単語である。

現在でも、Toamasina地方にはこう呼ばれる人びとが多く居住している。歴史上最も有名なzanamalataは、18世紀前半にBetsimisaraka王国を建国したRatsimilahoである。彼は、イギリスの海賊を父に、Fenoarivo地方の「貴族」の出身女性を母親に持つ。Betsimisarakaの名称も、このRatsimilaho王によって、自らの王国の末永らんことを願って与えられたものである。残念ながら、Betsimisaraka王国は、その名づけの意図に反し、1751年のRatsimilaho王の死後、王位を継承した息子が暗殺され、内部分裂を起こし瓦解してしまう。

その一方、Ratsimilaho王死後の18世紀後半、コモロ諸島および東アフリカ沿岸は、マダガスカル人の海賊による猛烈な奴隷狩りや略奪にさらされる。そのため、アラビア交易とヨーロッパ船交易との双方により潤ってきたコモロ諸島は、経済的に大きな打撃を受け疲弊してしまう。この襲撃を行ったのは、Sakalavaの人びととBetsimisarakaの人びとの連合、さらにはヨーロッパの海賊との連合であったと言われる。大規模な襲撃では、3000人くらいが一団をなしたが、この襲撃の詳細などは明らかではない。

66

Betsimisaraka王国の中心地の一つFenoarivoの町

現在町の中には、当時の王国の遺構は見られない



67

インド洋交易の中のSakalava王国

Sakalavaと言う単一の民族があるように思われているが、15世紀頃現在のFort-Dauphinの北辺りに上陸した集団が、西進の後北上し、16世紀から18世紀にかけてMorombeの北からNosy Be付近にかけて樹立した複数の王国群を指す。Maroseranaと呼ばれるこの王族同士の間には親族関係があるが、それぞれの王国は自律性が高く、互いに戦争や牛の争奪戦をしていた事例も多い。また、王族の支配下にあった集団は起源も習慣も言語も多様であった。一般に、Maintiranoより南部をMenabe、SoalalaやBesalampyより北部をBoinaと呼ぶ。

このSakalavaが統一王国ではないにせよ、西海岸一帯に長大な王国群を築くことができた理由として、次のような事柄が考えられる。

- 1.) 先住民を、fitampohaやfanompoanaなど王国の祭事に「土地の主」として組み入れると共に、婚姻関係を結んだこと。
- 2.) 東アフリカ沿岸からコモロを経るアラビースワヒリ交易網に連なり、奴隷やコメや牛を輸出して財力を蓄積したこと。
- 3.) マダガスカル人の西海岸を訪れるヨーロッパやアメリカの船に奴隷やコメを売り、代わりに鉄砲を入手したこと。

68

北都Sakalava王国Boina系の女王
Binao (1863?-1923) 出典: *Histoire Générale de L'Afrique Noire* tome II, P.U.F., 1971.

インド洋交易を基盤に発展してきたSakalava王国の特長は、19世紀前半にImerina王国による攻撃を受けた際にも、いかにたくましく奮闘している。この時、北部のSakalava王国の王たちがとった行動は、次のようなものである。

- 1.) Nosy Lava、Nosy Mitsio、Nosy Beなどの離島に逃げ込む。
- 2.) そこも危ないとみるや、レユニオン島の長官を通して、フランスの保護を求め。⇒1840年と1841年に保護条約実現。
- 3.) 対岸のザンジバル島のスルタンおよびそのスルタンを通して宗主国オーストリアに對し援軍を要請する。⇒実現せず。
- 4.) 1825年、Andriantsoly W、コモロ諸島の一つMayotte島に逃げ込み、そのスルタンとなる。1841年にAndriantsoly Wは、フランスに對しMayotte島、MraimbityやSoalalaの領土を6000フランで売却。



69

サカラヴァ王国の兵士

出典: R.Decary, *Madagascar 1916-1945*, La Réunion: Azalées Editions, 2003.

写真は、フランス植民地時代の1939年に、サカラヴァ王国の儀礼における踊り手を写したものである。

踊り手は、19世紀のサカラヴァ王国兵士の服装を身にまとい、ライフル銃を手にしている。左の男性の被り物に書かれた十字架は、キリスト教を表すものではなく、赤に白地で、北部サカラヴァのBoina (Boina) 王国の旗を模している。

19世紀の北部サカラヴァ王国の兵士たちは、これにかなり近い服装をしていたものと推測される。



70

ベニョフスキー/はんぺんごろろう 日本とマダガスカルのお騒がせ男 1

*ハンガリー人ベニョフスキーによる1790年(寛政二年)『ベニョフスキーの回想と旅行記』(Memoirs and Travels of Mauritius Count de Benyowski)

ベニョフスキー、本名ベニョフスキー・モーリッツ(Benyovszky Moric)、自称マウリス・アウグスト・アラダー・ベニョフスキー伯爵(Maurice Auguste de Aladar [Baron de] Benyowski)。1741年にハンガリーのヴェルボワ(Verobova)に生まれたと『回想と旅行記』に記載されているが、歴史考証によれば1746年生まれと言われる。

1769年ロシア軍の捕虜となったベニョフスキーは流刑と逃亡を繰り返した後、1771年4月、彼とその仲間たちはカムチャッカ半島の流刑地先で反乱を起こして船を強奪、5月太平洋に船出した。この航海の途中、彼らは、7月に「鎖国中」の日本の四国沿岸に投錨し、薪水を補給した。当時の日本の記録には、「ハンガリー人」が訛った「はんぺんごろろう」と記載されている。沖繩から台湾を経てマカオで船を乗り換えた後、彼は1772年にフランス船に乗り、途中当時はまだフランス領であったフランス島(モーリシャス)を経由して、同年パリに到着した。

71

ベニョフスキー/はんぺんごろろう 日本とマダガスカルのお騒がせ男 2

パリに着いたベニョフスキーは、海軍省大臣はじめヴェルサイユの宮廷人たちに、自らがマダガスカルに17世紀のフォー・ドゥ・ファン建設以来のフランスの進出拠点を設けることおよびそのことのフランスにとっての利益について熱弁をふるった。

1774年フランスの援助を取り付けることに成功した彼は、マダガスカル北東部のAntongi湾内の現在のMaroantsetra近くを建設し「ルイ王の村」(Louisbourg)、河口上流一帯を「健康な平野」(Plaine de la Santé)と命名した。

半年後、ベニョフスキーはパリに對し、全島を征服しそこから献上される税は莫大なものであることを報告した手紙を送りつけた。1776年、ベニョフスキーのこの企てについての査察団2名が、派遣されて来た。しかし彼らがそこで見たものは、熱病によって300名以上の随員を失い朽ち果てる寸前の家屋がいかにあるだけの「ルイ王の村」と度重なる戦闘によって荒廃した一帯であり、貢ぎ物を納める服従したマダガスカル人の姿はおろか、定期的な東海岸との交易さえも見出すことができなかった。

フランスに召喚されたベニョフスキーは、自分はマダガスカル人にメッカから来たことを主張するRaminia王の子孫であると信じられているため「マダガスカル王」を名乗っているとの話を粉飾してマダガスカルに出入るの機会を再度与えるようルイ16世に弁明したものの、受け入れられなかった。その後彼は、オーストリア皇帝、イギリス王に對しても同様な進言を行ったものの、やはり期待した援助を受けることはできなかった。

72

ベニョフスキー/はんぺんごろう 日本とマダガスカルのお騒がせ男 3

1784年、アメリカに渡ったベニョフスキーは、バルチモアで後援者に恵まれ、会社を興し船を一艘入手した。その船で彼は、1785年に再びマダガスカルに渡り、当初北西海岸に上陸したものの、Sakalava族Boina王国の攻撃を受けたため、Antongil湾に船を回航し再上陸した。彼は、そこにあったフランスの小さな砦を奪って、**マダガスカル皇帝**を僭称し、東海岸一帯のマダガスカル人たちに對しフランスを相手に反乱を起こすよう扇動した。

これに對し、フランス島(モーリシャス)総督は、(インドの)ポンディッシャリ連隊に屬する60名の兵員を差し向けて彼を拘束しようとしたが、1786年5月24日(もしくは23日)、ベニョフスキーは投降を拒否し、分遣隊の放った銃弾に当たって死んだ。

*『ベニョフスキー航海記』東洋文庫160 沼田次郎・水口志計夫訳 1970年 は、上記『回想録』の日本に関する記述を中心とした抄訳本。また、みなもと太郎の歴史マンガ『風雲児たち6 海から来た男』1984 潮出版の中でも、日本とマダガスカル、あるいはヨーロッパにとってのお騒がせ男ベニョフスキーが取り上げられている。

73

歴史的視点のポイント

マダガスカルの歴史書や民族誌を紐解くと、<××王国>や<△△王>と言った記述がそこかしこに見出される。しかし、この単語には十分な注意を払う必要がある。なぜなら、南西部のMahafalyの人びとの民族学的調査を行ったK. Eggertが、そこで従来記述されてきた王が見つからなかったとの挑戦的な論考を書いているからである(Eggert, Karl. 1981. Who are the Mahafaly? Cultural and social misidentifications in southwestern Madagascar. *Omaly sy Anio* 13-14:149-176.)。K. Eggertが、現代Mahafalyの人びとの間で見出したのは、一族を代表して神や祖先に対する供犠を執行する人間であり、政治的な権力を持って人びとを支配する個人ではなかった。

この視点は、ほとんどの民族において記されている<王>についても再検討を要請するものである。なぜなら、現代の<王>や<女王>は市井の人間であり、その居所なども他の人びとのそれと大差はないからである。また、アフリカ大陸同様、マダガスカルにおいても昔の<王国>の遺構はほとんど残されていない。イメリナ王国の<王>にしたところでAmbohimangaに遺されているAndrianampinimerina王の家屋も、ごく質素なものである。したがって、ヨーロッパや中国などの<専制君主>と同列にマダガスカルの<王>を考えると、大きな誤りを犯すことになる。実際にも、<王>や<貴族>の特権とされるものは、生を供犠する際の唱えごとや喉を切るものなど儀式に関するものである場合が多い。

74



75

イメリナ王国(Imerina)

出典:H.Deschamps, *Histoire de Madagascar*, Paris: Berger-Levrault, 1972



76

Vazimba

メリナの人びとが、北東部のAntonile湾内に上陸して内陸を南下、現在のアンタナナリヴを中心とする地域にやって来た当時(15世紀?)、そこには氾濫原の上に森におおわれた丘が点在し、Vazimbaと呼ばれる先住民が住んでいたと伝承されている。メリナの人びとはこのVazimbaの人びとと通婚関係を結ぶ一方、やがて武力をもってアンタナナリヴ地方から駆逐したと言われる。しかしながら、この「Vazimbaとは誰か?」については、諸説あり確定していない。

- 1.) 先住の異民族。
- 2.) メリナの祖先の中で、発展の遅れた人びと。
- 3.) 19世紀のキリスト教宣教師たちが、キリスト教改宗以前のメリナの人びとをデフォルメしたもの。

1.) の先住の異民族説をとる立場の人びとは、現在西部地方に点在して居住するVazimbaの人びとが、この直系の子孫に他ならないと主張する。しかしながら、19世紀に書かれた本の中でも、Vazimbaは既にイメリナ地方の人びとが行う願掛けの対象や禁忌の対象と言う、習慣としてしか存在していなかった。

⇒マダガスカルの人びとの間に広く見られる、土地には霊を含む先住の存在がいると言う<土地の主>の一形態として考えることが妥当である。

77

イメリナ王国の形成

およそ16世紀初頭頃から、島中央部のアンタナナリヴ平野において王国形成が始まる。この王国形成の動きは、Andriamasinalona王(1676年~1710年在位)による統一およびその王国民をImerinaanvaniandroと命名することによって、一旦終了する。また、この王国形成から統一までの200年間に、18世紀後半からの王国拡大に連なる革新や発展が生じた。

- 1.) 稲作の導入。当初、メリナの祖先は、稲を知らず、豆を食べていたと伝承される。
- 2.) 16世紀後半、新年祭にあたるfandroana(統治者の沐浴)の創設。
- 3.) 製鉄・鍛造技術の普及。<先住民>のVazimbaは、鉄器を知らなかったと言われる。
- 4.) 排水路や堤防の建設および新田開発の継続。

しかしながら、1710年のAndriamasinalona王の死後、息子たちの間で王位継承争いが生じ、王国は再び分裂してしまう。この内乱に乗じて、ヨーロッパの奴隷商人たちがイメリナ王国にまでさかんにやって来るようになり、奴隷と引き換えにイメリナ王国では、鉄砲・弾薬やラム酒が多く流布するようになる。

78

イメリナ地方の低地水田農法

丘の上に村落が立地し、氾濫湿原を干拓した水田が低地に広がっている 首都アンタナナリヴ郊外

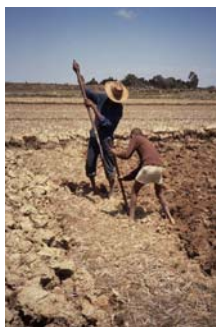
田植えが終わった低地水田 この地方では18世紀時点で移植がおこなわれていた 首都アンタナナリヴ近郊



79

イメリナ地方の低地水田農法

鋤(angady)を用いた耕起 首都アンタナナリヴ近郊



鋤(angady)を用いた田ごしらえ 首都アンタナナリヴ近郊



80

Andrianampoinimerina王の治世

Ambohimanga村の王Andrianampoinimerina(即位前の名前 Ramboasalamsimarofohy)が、1787年に王国の再統一を果たす18世紀から彼の治世において生じた変革には、下記のようなものがある。

- 1.) 共同夫役とfokonolona制の整備: 王国の制度として夫役を整備し、灌漑水路や堤防などの公共事業を進め、各ムラ(fokonolona)に治安や貢租などの共同責任を負担させる一方、一定の自治を与えた。
- 2.) 王国の役人と代官の設置: 統一王国を整備するため、12人の「大臣」を置くと共に、各地方の統治の責任を負う代官(vadintany)を派遣した。
- 3.) <法>の設定: 口頭ではあるものの、王国民が等しく守るべき事柄について王自らが布告を行い、裁判制度の大枠を定めた。またtangenaと呼ばれる毒を用いた盟神探湯について、証拠がない場合と証拠があっても被告が否認している場合にのみ用いることを限定した。
- 4.) Antemoro王国から識字法・占い法・割礼祭を導入: 特に割礼祭は7年毎の王国の大祭として行われるようになった。

81

拡張期以前のイメリナ王国

Ambohimangaに保存されている
Andrianampoinimerina王の家。



Ambohimangaの王宮内にある、新年祭
(fandroana)の際に殺す牛を入れておいた
甕。



82

イメリナ王国の拡張

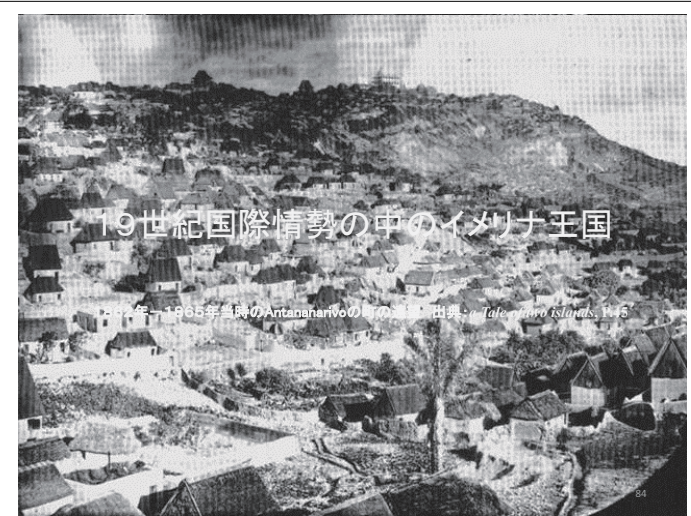
Andrianampoinimerina王がイメリナ
王国の再統一を果たした1787年頃、
イメリナ王国は、現在のアンタナナリ
ヴを中心に半径30kmくらいの、領
域的には小王国に過ぎなかった。

その後Andrianampoinimerina王は、
イメリナ王国の従来の領域を超え、
南への領域拡張に着手する。最初に
Vakinankaratra、続いてBetsileoの諸王
国を征服し、Vakinankaratraはイメリ
ナ王国を構成する6つの地方区分の
一つとして編入する。

Andrianampoinimerina王は、息子
のRadama I世に対し、「海が私の境
界である」との有名な遺言を残して、
1810年に死去する。



83



19世紀国際情勢の中のイメリナ王国

1865年 - 1865年頃のAntananarivoの鳥瞰図。出典: *Tales of Madagascar*, p. 6

84

ラダマ1世(1810年~1828年在位)

父Andrianampoinimerina王の後を継いだラダマ1世も、イメリナ王国史上、特筆
される王の一人となる。1815年ウィーン会議によって、インド洋の良港モーリ
シャスをフランスから獲得したイギリスは、すぐさまモーリシャス総督を任命し、
モーリシャス総督は1815年イメリナ王国に使者を派遣した。

1.) 1817年イギリスとイメリナ王国との間で友好通商条約が締結され、そ
の条文中で、島外との奴隷取引を禁止する見返りとして王は金貨や銀貨およ
び銃・銃弾・弾薬・軍服など軍備をも毎年供与されること、さらにラダマ1世を「マ
ダガスカル王」と認めることが明記された。

2.) この条約に従って供与された武器および軍事顧問に雇ったフランスやイギ
リスの軍人を基に、階級制のある常備軍foalindahyを創設。1817年の
Toamasina地方を皮切りに、Sakalava王国、南東部への遠征を決行。

3.) 1820年 ロンドン宣教会協会(LMS)が、王都アンタナナリヴを中心に自ら
が制定したマダガスカル語のアルファベット表記化を活用し布教・教育活動を展
開すると共に、建築家・鍛冶師・なめし革師・織工・活字工・煉瓦職人・メッキ工な
どの技術者を派遣し、技術面と文化面の双方において大きな革新と移転を王国
にもたらした。

85

1850年代のイメリナ王国の王 宮と王国軍

出典: William Ellis, *Three Visits to
Madagascar 1853-1854-1856, A
Journey to the Capital*, London: John
Murray Albemarle Street, 1858. エッ
テング画

ラダマ1世が、イギリスからの軍事援
助を得てイメリナ王国の常備軍を創
設した時からおよそ30年ほど後の絵
であるが、創設当時の軍装や装備と
大きな違いはないものと推定される。
先頭の太鼓手やラッパ手も、イギリ
スから提供された装備を取り入れ、王
国軍に組み入れられたものである。



86

ラナヴァルナ1世(1828年~1861年在位) 1

ラダマ1世が1828年に36歳の若さで亡くなった後、その妻がRanavalona 1世と
して即位する。この女王の治世については、歴史家の意見が二つに割れている。
大勢としては、キリスト教を弾圧し、厳しい民衆・被支配地域の統治を行い、外国
との交流を大幅に制限した保守的で残忍な性格の為政者とされる。一方、19世
紀前半から半ばの、欧米列強が植民地分割競争を行う難しい国際情勢の中で、
イメリナ王国とマダガスカル人の独立を堅持した誇り高い民族主義者として女王は
評価されている。

1.) 1835年に女王の補佐役として平民出身のRainiharoを任命。軍事遠征の
際は、司令官も兼務。この後、Rainiharoとその一族の宮廷内および王国の政
治における発言力が増大してゆく。

2.) マダガスカル各地への軍事征服事業を継続。北西部や南部・南西部への
遠征を行うが、Sakalava王国のMenabe地方やAndoy地方の征服には失敗する。

3.) お雇い外国人の登用: 1831年、乗船していたインドに向かう船がマダガ
スカル沖で難破したことをきっかけにラナヴァルナ1世に召し抱えられたJean
Labordeは、Mantsoalに工房を作り、弾薬、大砲、石鹼、レンガ、紙、皮革、ガラ
スなどを生産。また、息子で後のRadama II世の教育係にも任命される。

87

晩年のラナヴァルナ1世女 王の肖像写真(1860年 頃?)

出典: Raymond Delval, *Radama II,
Prince de la Renaissance malgache*
1861-1863. Paris: Editions de l'Ecole,
1972.

キリスト教への改修と布教を禁止し、
マダガスカル人信者を過酷に弾圧し
た上、外国との貿易を特定の港に限
定するなどしたため、後世、<反西
欧的>な施政をひいた女王と一般に
評されているが、この写真の<洋装
>を見ると、お雇い外国人にガラス
や石鹼などの奢侈品を作らせていた
ことに通じる、<西欧趣味>が看取
される。



88

ラナヴァルナ1世(1828年~1861年在位) 2

現代ではキリスト教の弾圧者として名高いラナヴァルナ1世も当初から、反キリスト教的
な施策を採用していたわけではない。むしろ、その在位の初期には、宣教会による教育が
確実に浸透し、1835年には完全マダガスカル語聖書および「マダガスカル語-英語辞
典」、「英語-マダガスカル語辞典」が刊行されている。しかし、後述する外国との関係お
よびイメリナ王国の旧慣(とりわけ呪物・崇拜)の批判などから、次第にキリスト教布教
への懐疑を深めてゆく。1835年、マダガスカル人のキリスト教への改宗が公式に禁止さ
れる。これによって布教活動のできなくなったロンドン宣教会関係者は、一部の技術者
や職人を残して、1836年にマダガスカルから退去を余儀なくされる。また、1845年には、
国内居住外国人に対しても国内法を適用することが決定され、多くの外国人がマダガス
カルを退去した。

一方、フランスを中心としたヨーロッパ列強のマダガスカルへの干渉や領土獲得の動き
が活発化する。

1821年 フランスがSainte Marie島を領有化。

1824年 フランスが、TamataveおよびTitingo湾に駐屯するイメリナ王国軍に攻撃を加
える。

1841年 フランスが、Nosy BeなどをSakalavaの王たちの要求を受け入れ、保護領化。

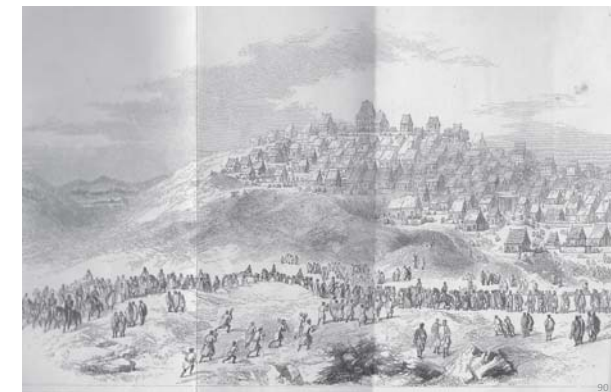
1845年 外国人への国内法の適用を協定違反として、フランス・イギリスの連合軍が
Tamataveを攻撃、これを占領しようとするも失敗。

1857年 元モーリシャスの農場主でラナヴァルナ1世の顧問でもあったJ.F.Lambertが、
ラナヴァルナ1世を退位させその後に親西欧的な皇太子のラクトゥ・ラダマを王位につける
宮廷内クーデターを計画するものの失敗。

89

1850年代の王都アンタナナリヴの遠景

出典: William Ellis, *Three Visits to Madagascar 1853-1854-1856, A Journey to the Capital*,
London: John Murray Albemarle Street, 1858. エッテング画



90

1860年代当時の女王宮周辺

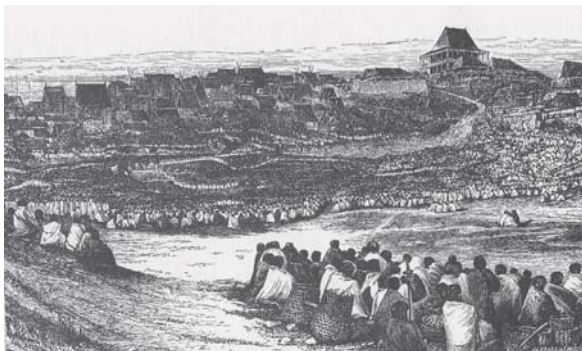
出典: William Ellis, *Madagascar Revisited*, London, 1867



91

1860年代当時の女王宮と法令公布に集まった民衆

出典: William Ellis, *Madagascar Revisited*, London, 1867.



92

ラダマII世(1861年~1863年在位)

ラナヴァルナI世の死後、息子のラダマII世が王位に着き、彼は早速、ヨーロッパ諸国との関係を取り結び、自分を「マダガスカル王」と認めさせると共に、布教およびマダガスカル人の改宗を許可した。

その一方、1862年、ラダマII世は、1855年にランベールに与えられた鉱物資源と農産資源開発利権の特許状を裁可し、さらにモーリシャス出身でイギリス国籍のコールドウェルに対しても、島北東部にあるヴヘマール地方についての譲渡状を発行した。また同年、フランス国の代理人コモドール・デュプレは、ラダマII世に、マダガスカル島内の幾つかの地方に対するフランスの権利を承認する旨の秘密協定に署名させた。この秘密協定への署名が発覚するや、フランス政府は関知せずとの態度を表明したものの、王府の閣僚達は無差別に外国や外国人との書類に署名しているかに思われた王に対する不信感を募らせた。

さらに、menamaso と呼ばれる自らの取り巻きの廷臣を王府の政治で重用したことは、ラナヴァルナI世の治世以来、顧問ないし首相として権勢をふるっていた平民一族の怒りをかい、1863年に王とその取り巻きたちは、暗殺される。

93

ラダマII世とその妃Rabodo(ラダマII世死後に即位しラスヘリナ女王となる)

出典: William Ellis, *Three Visits to Madagascar 1853-1854-1856, A Journey to the Capital*, London: John Murray Albemarle Street, 1858. エッチング画

母親のラナヴァルナI世と異なり、息子のラダマII世は極端なく西欧びいきとして知られている。そのことは、この肖像画からもうかがわれる。ラダマII世が右手に持っているのは聖書であるが、在位2年で暗殺されたためか、彼自身はキリスト教に改宗していない。



94

ラインライアリヴニ宰相(1864年~1896年在位)の統治

ラダマII世の暗殺後、妻のラスヘリナ(Rasoherina)女王が即位するが、王を暗殺した上女王をも軽んじるような宰相Rainivoninahitrinionyの振る舞いに対する宮廷内および民衆の反感が高まり、その弟のラインライアリヴニ(Rainilaiarivony)が新たな宰相に任命される。彼はその後、Rasoherina、Ranavalonall世、Ranavalonall世、歴代の女王と結婚を繰り返し、イメリナ王国がフランスによって敗れるまでその権力の頂点に立ち続けることになる。

- 1.) 1868年 Ranavalonall世とRainilaiarivonyが、プロテスタントに改宗。
- 2.) 1868年『101条法典』、1881年『305条法典』の成文法を發布。
- 3.) 1880年 義務教育制度施行。
- 4.) 国民皆兵制の導入。

Rainilaiarivony宰相は、最終的には王国を「立憲君主制」に導いて西欧列強に対抗しようとしたものの、最後まで彼自身の寡頭政治を抜け出すことができなかった。さらに、国民皆兵制や列強に対抗するための兵器の購入のための増税などは国民に大きな負担を強いることとなり、彼の意図するところとは逆に、かえってイメリナ王国の国力を衰退させることとなってしまった。

95

イメリナ王国宰相ラインライアリヴニの肖像画

イメリナ王国士官の頃の肖像画

出典: William Ellis, *Madagascar Revisited*, London, 1867.



イメリナ王国宰相時の写真

出典: Marie-France Barrier, *Ranavalona, dernière reine de Madagascar*, Paris: Editions Balland, 1996.



96

マダガスカルに対するフランスの領土的欲求の背景

1880年代以降の、マダガスカルに対するフランスの新たな領土的野心には、下記のようなものがある。

- 1.) レユニオン島選出国会議員の院外団は、レユニオン島内のクレオール人の過剰人口をマダガスカルへ移住させ、またイギリスが開発を狙っていると思われた鉱産資源や農産資源をわがものとする事ができるよう、マダガスカル島全体の完全征服を要求した。
- 2.) イメリナ王国における布教においてロンドン宣教協会の活動に対して大きく出遅れたカトリックの宣教師たちは、フランス政府による政治の後押しを要請した。
- 3.) 進出著しいイギリスやアメリカの商人たちを出し抜き、マダガスカル市場の制覇をもくろむフランスの一部実業家たちによっても、上記の院外団や宣教師たちの要求は支持された。

97

フランスによるイメリナ王国への要求 1

1878年、ラナヴァルナI世に召し抱えられ大砲・銃器・弾薬・煉瓦・石鹼などをマダガスカルの工場で生産すると共に貿易商も兼ねてイメリナ王国の政治にも深くかかわることとなり、ラダマII世の即位時にはフランス領事をも勤めた、フランス人のジャン・ラポルドゥが、不動産を残してアンタナナリヴで死去した。そのため、パリに在住していたラポルドゥの甥たちが、1868年の新条約に基づいてその遺産の相続を請求したものの、イメリナ王国政府側は、「全ての土地は女王に帰属する」と言う土地に関する国内法を根拠にこれを拒絶した。すなわち、外国人による土地の受益権はその生存中に限り認められるが、当該人の死後その受益した土地は女王に返還されると言うのが、イメリナ王国側の条約草案および国内法に照らした解釈であった。しかしながら遺産相続が認められるか否かは、その当時マダガスカルに多数居住していた外国人農園主や商人たちにとっては、自分たちの生活基盤にかかわる切実な問題であった。1881年、この問題をめぐりフランスから代理人が派遣され、その代理人がマダガスカルに到着する直前に、イメリナ王国において『305条法典』が布告された。その法典の第85条においては、マダガスカルの土地を外国人に売却することはできないことが記載されていた。フランス側はこのことを条約の違反と捉え、代理人に対し宰相による25万フランの対価の提供を拒絶させ、45万5千フランの倍賞の請求を指示した。

98

フランスによるイメリナ王国への要求 2

既に当時フランスが領有していたコモロ諸島からやって来たダウ船トゥアレ号のアラブ人でフランス臣民の身分を持つ船主およびイスラム教徒の船員たちが、イメリナ王国の宗主権の及ばない島の北西部のMalambitsy湾で、Sakalava王国の兵士達によって殺害された事である。銃器の密輸に携わっていたこれらの人びとは、Sakalava王国の兵士の臨検を受け船荷の引き渡しを命令されたものの、兵士達に発砲し、逆に四名が射殺されたのである。この時フランス側は、1868年の新条約においてイメリナ王国女王をマダガスカル全島の宗主権者として認めた条項を根拠に、イメリナ王国側に6000フランの賠償金を請求した。イメリナ王国政府は、トゥアレ号の乗組員たちが非合法的なSakalava地域への銃器の密輸に携わっていたことおよび先に発砲したことを挙げ、この賠償金請求を拒絶した。

99

フランスによるイメリナ王国への要求 3

1881年、北西部のSambirano方へと宰相ライニライリヴニによって派遣されたロンドン宣教協会関係者二名が、同地方のSakalava王国の首長たちに対し、イメリナ王国旗を掲揚するよう求めた。これに対しフランス側は、1840年と1841年にSakalava王国の王たちとの間で締結した保護条約を理由に、イメリナ王国政府に抗議を行った。同地方におけるイメリナ女王の宗主権の確立と確認を意図していた宰相Rainilaiarivonyは、1868年「マダガスカル女王」とナポレオン三世との間で結ばれた条約を持ち出し、この抗議をねづけた。

フランス側が、これらの三つの出来事に共通する「イメリナ王国の宗主権」について本気で論議する意図はなく、あくまでもマダガスカル全体の保護領化と言う最終目的に向けた格好の口実を捜しているにすぎないことは、ライニライリヴニを始めとするイメリナ王国の権力者たちの誰の目にも明らかであった。この「油断のならないフランス」に対抗してイメリナ王国政府は、海外からの銃器・大砲や弾薬の購入調達を強化したが、このことは王国国民に対し重い負担を課すこととなった。

100

第一次フランスーイメリナ王国戦争 1

1882年3月21日、在アンタナリヴ・フランス領事は突如外交関係を断絶し、王都を退去した。同年6月、フランスの軍艦が、イメリナ王国の宗主権について係争中の北西部のアンパシンダヴァ湾において、特に抵抗も受けずにイメリナ王国旗を引きずり降ろした。

このような事態に直面し、宰相ライニライリヴニはフランスとの戦争を回避するために、1882年10月から1883年8月にかけて、自分の甥である外務大臣を団長とする外交使節団を、ヨーロッパおよびアメリカ合衆国に派遣した。使節団は、係争中のアンパシンダヴァ湾からイメリナ王国旗をおろした上守備隊を引き揚げることに同意し、また外国人に対する長期借地権を受け入れたにもかかわらず、エジプトにおける自由裁量権との引き替えを望むイギリスの後押しを受けたフランスは、一切の合意を拒否した。

101

第一次フランスーイメリナ王国戦争 2

1883年5月、マダガスカルの外交使節団がまだヨーロッパに留まっている間に、フランス海軍は北西部の港町マジュンガを砲撃し、ここに第一次フランスーイメリナ戦争が勃発した。「戦争」とは言ってもこの第一次フランスーイメリナ戦争は、フランス海軍の小艦隊が島の北西部や東部のイメリナ王国支配下の港湾を砲撃し、最大の港町アマタヴを占領して主要な港湾を封鎖しただけであり、軍事的側面よりも外交戦の様相の強いものであった。

当初フランスは、南緯16度以北の土地の割譲および島内に居住するフランス人の土地所有権の承認を、ライニライリヴニに対して求めた。けれどもこの外交戦が長引くにつれ、フランスの要求は、マダガスカル全島の保護領化の強制へと変化していった。フランス側が領土要求を突きつけ、イメリナ王国側がそれに抵抗する外交戦が果てしなく繰り返され、両国間に厭戦気分が広がりはじめた。イメリナ王国側では、港湾封鎖と戦費調達によって経済的危機が生みだされ、それが政治的な不安を増大させていた。フランス側でも、1883年からベトナムのドンキン湾へと派兵を行っていたため、マダガスカルに大軍を追加投入してこれを軍事的に制圧し占領すると言う二正面作戦を展開することは困難であった。

102

第一次と第二次戦争の戦間期

1885年12月17日、いずれが勝者が敗者かの決着がつかないまま両国間で条約が締結され、第一次フランスーイメリナ戦争が終結した。停戦条約において明文化された重要な合意事項は、下記の通りである。

- 1.) フランスは、マダガスカルの外交関係の全てを代行する。
- 2.) フランスは、ラナヴァルナ女王がマダガスカル全島の君主であり、唯一の土地所有者であることを認める。
- 3.) マダガスカルは、フランスに1000万フランの賠償金を支払う。
- 4.) フランス海軍は、ディエゴスアレスを占有する。
- 5.) フランスは、アンタナリヴに武装警護兵と共に公使を駐在させる。
- 6.) フランス国籍を有する人間は、99年間の長期借地権を取得することができる。

4と5については付帯条項があり、占有することのできる範囲、駐在させることのできる警護兵の人数を定めていたが、締結後の交渉においてフランス側はこれを顧慮することなくふるまい、一方イメリナ王国側はこの条項を根拠にフランス側の領土要求に対して抵抗を試みた。このような条約をめぐる様々な齟齬や軋轢の中でもとりわけ大きな争点を成したのが、1と2の条項それぞれから引き出される、フランス側とイメリナ王国側との解釈の違いであった。当然のことながらイメリナ王国側は、2の条文を王国の独立および主権の確認と解釈した。一方フランス側は、1と2の条文双方をもって、マダガスカル全島が条文中にその語は一切存在しない「保護領」であると解釈した。

103

第二次フランスーイメリナ王国戦争1

1890年、フランスがイギリスのザンジバルに対する保護領化を認める代わりに、イギリスはフランスによるマダガスカルの保護領化を認める英一仏協定、いわゆる「ザンジバル協定」が締結された。将来的な領土分割の合意がフランスとイギリスの間で成立した時、もはや条文解釈としての「保護領」が問題ではなかった。マダガスカル全島の主権者たる女王を擁するイメリナ王国政府が、現実の保護領化を受諾するか否かであった。

1894年1月、フランス議会は政府に対し、フランス国籍の者を保護して秩序を回復し、またマダガスカルにおけるフランスの「諸権利」を維持するためいかなる手段をも取ることにについて完全な承認を与えた。1883年当時とは異なり、今回は世論も議会も、マダガスカルの保護領化を実現する軍事行動を支援していた。

104

第二次フランスーイメリナ王国戦争 2

1894年10月、マダガスカル駐在公使を勤めたこともあるル・ミール・ドゥ・ヴィレが、フランス側特使としてマダガスカルに派遣された。ヴィレは、外交だけではなく内政についての掌握、すなわち実質的植民地化を指し示した新しい草案を宰相ライニライリヴニたちに提示し、その受け入れを期日を定めて迫った。その最後通牒の返答期限の10月26日、宰相からなんの实質的返答も得られなかったため、翌27日特使ヴィレは「公使公邸のフランス国旗をおろしフランス国籍を持つ者は自分に続くよう命令を発して首都を去り、東海岸に向かった。

1894年11月30日、フランス議会在、372票対135票(もしくは377票対143票)の大差で、マダガスカルへの派兵とそれにかかわる6500万フランの戦費支出を可決。

1894年12月12日 フランス海軍が東部の港町Tamataveを攻撃、これを占領。

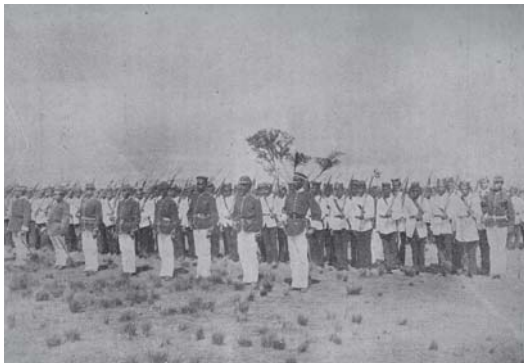
1895年 1月14日 フランス軍本体が北西部の港町マジュンガを攻撃、これを占領。マジュンガを基点に、アンタナリヴ攻撃部隊1万8000人を揚陸。

105

第二次フランスーイメリナ王国戦争画像 1

イメリナ王国軍歩兵隊

出典：S.Chapus, *Quatre-vingts années d'influences européennes en Imerina (1815-1895)*, Tananarive: 1925.

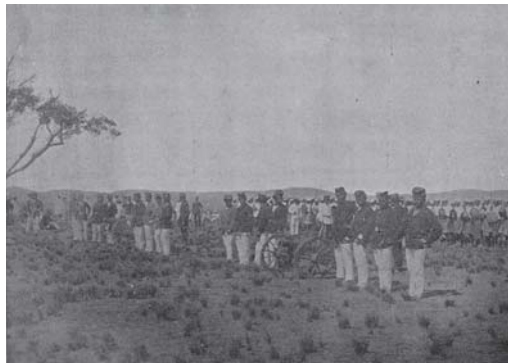


106

第二次フランスーイメリナ王国戦争画像 2

イメリナ王国軍砲兵隊

出典：S.Chapus, *Quatre-vingts années d'influences européennes en Imerina (1815-1895)*, Tananarive: 1925.



107

第二次フランスーイメリナ王国戦争画像 3

出典：H.Gally, *La Guerre a Madagascar*, 1896.

堡壘の中で警戒するイメリナ王国軍兵士



野壕の中でフランス軍を迎え撃つイメリナ王国軍



108

第二次フランスーイメリナ王国戦争画像 4

出典:H.Gally, *La Guerre a Madagascar*, 1896.

当時のイメリナ王国軍の軍装



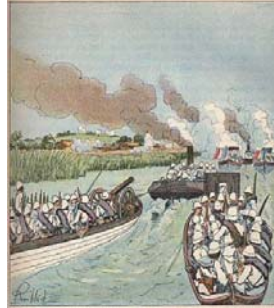
Andribaの戦いにおいて敗走するイメリナ王国軍



109

第二次フランスーイメリナ王国戦争画像 5

Marovoayの町を河から攻めるフランス軍 出典:H.Gally, *La Guerre a Madagascar*, 1896.



ルフェーブル型荷馬車を通すために道路建設中のフランス軍 出典:同左



110

第二次フランスーイメリナ王国戦争画像 6

中央高地で作戦行動中のフランス軍

出典: Le docteur Edouard Hocquard, *L'Expédition de Madagascar*.

エッチング画。傷病兵の続出する派遣軍本隊から、比較的壮健な兵士が選抜され、雨季到来までに王都アンタナリヴを攻略する使命を与えられた軽装先遣隊が、中央高地において作戦行動するさまを描いている。上は、騎兵による偵察隊。下は、渡河する歩兵隊。

道路工事を行わずに進撃するこの軽装先遣隊により、雨季到来前の1895年9月30日に王都アンタナリヴの攻略を完了することができた。



111

第二次フランスーイメリナ王国戦争画像 7

傷病兵の搬送

出典: Capitaine TAM, *A Madagascar, carnet de campagne d'un officier*, Paris: Société Française d'Éditions d'Art.

第二次フランスーイメリナ王国戦争における派遣フランス軍の決算:

総兵力15000名 (H.Deschamps, 1972, p.227, E.Ralaimihoatra, 1976, p.200) ~ 18000名 (A.Clayton, 1987, pp.79-80)。アルジェリア人とソマリア人などの輻重軍夫7000名~9000名、騾馬6600頭、5000台のルフェーブル型二輪荷馬車。

この作戦の死者は、陸軍省の報告によれば5592人、ドランエヌ将軍によれば5765人、(J.Poirier, s.d., p.315)で、その中で戦闘行動中の銃撃・砲撃による即死者7名、負傷が原因で亡くなった者13名。死者数に輻重軍夫は含まれない。



112

フランス植民地化経験と<マダガスカル人>意識の形成

1895年9月30日フランス軍に對し降参をせしめるイメリナ国の使者

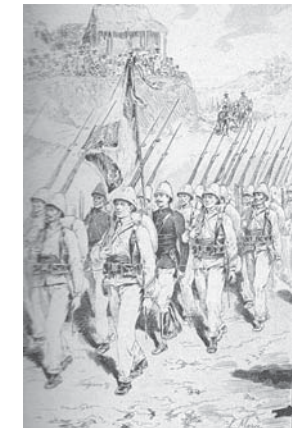


イメリナ王国のフランス保護領化

1895年 9月30日 第二次フランスーイメリナ王国 (Imerina) 戦争終結。フランス軍、王都 Antananarivo を占領。

1895年10月1日 フランス派遣軍先遣隊、アンタナリヴ市街に進駐。Ranavalone III世女王王国政府、フランス保護領となる旨を承諾する書類に署名。

右図 1895年10月 1日 アンタナリヴ市街に進駐するフランス軍先遣隊 出典: Capitaine TAM, *A Madagascar*, Paris: Société Française d'Éditions d'Art. 出版年不詳 p.193.



114

イメリナ王国の滅亡とフランス植民地化

1895年 10月15日 イメリナ王国宰相Rainilaiarivony、罷免される。

10月 フランスの占領に抵抗するMenalambaの反乱が、中央高地一帯で1897年にかけて続発し、フランス軍だけではなくイメリナ王国の行政官、神父や牧師、あるいは市場をも襲撃。

1896年 1月19日 元宰相Rainilaiarivony、アルジェリアに追放される(1896年7月17日アルジェリアで死去)。

8月 6日 フランス国会、マダガスカル併合を議決。

9月26日 奴隷制廃止の布告。

9月27日 Gallieni初代総督着任。

1897年 2月27日 Menalambaの反乱の責任を問われ、Ranavalona III世女王、レユニオン島へ追放される(後に1917年、アルジェリアで逝去)。それに伴いイメリナ王国の廃止が宣言される。

115

メナランバの反乱 Ambodimontyの戦い

出典:É. Grosclaude, *Un Parisien à Madagascar*, Paris: Librairie Hachette, 1898) 左がフランス軍 右がメナランバの反乱者たち



116

歴史的視点のポイント

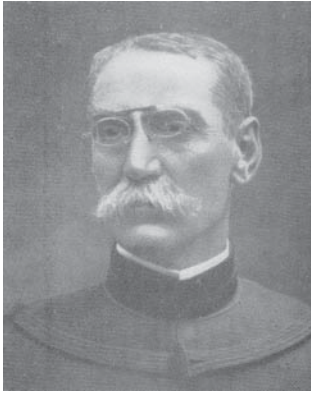
第一次・第二次イメリナ王国-フランス戦争は、イメリナ王国の為政者たちにとっては「マダガスカルとフランス」との国の存亡をかけた戦いであった。しかし、イメリナ王国によって征服され支配された地域の住民にとっては、それはあくまでもイメリナ王国とフランスとの間の戦争でしかなかった。また Menalambaの反乱は、vazaha(白人=フランス)の侵入に対する民衆の戦いであったが、vazahaに対する「われわれ」とは誰かについて反乱参加者の間で共通した認識が存在したわけではなかった。

1896年から1960年までの64年間にわたるフランス植民地統治が、マダガスカルに与えた一番大きな影響とは、「われわれマダガスカル人」の意識の形成であるかもしれない。19世紀初頭まで、マダガスカル人の側にマダガスカル島を指す固有名詞とそこに住む人びと全体を指す単語は存在しなかった。<マダガスカル>の語源には複数説があるが、いずれをとるにせよ島を訪れたヨーロッパ人たちの間で使われはじめ、その後マダガスカルの人びとが後追的に用い始めたことは間違いない。<マダガスカル>と<マダガスカル人>の名乗りが、内実を獲得するのはこのフランス植民地期においてである。

117

初代総督ガリエニ(1896年～1905年在任)によるマダガスカル統治 1

着任当初ガリエニ総督は、マダガスカルに複数ある<民族>を分断して互いに牽制させ、島内で最も強大であったイメリナ王国とそれを構成するMerina系の人びとの影響力を減少させる、<人種政策>(politique de race)を実行する。しかし、インドシナや西アフリカで豊富な植民地行政の経験をもつ軍人出身のガリエニは、イメリナ王国の人材や制度を活用した方が、フランス支配の速やかな確立に役立つことを認識し、数年で政策を転換した。



右図 ガリエニ総督の肖像写真
出典:H.Deschamps, *histoire de madagascar*, 1972, Paris:berger-levrault.

初代ガリエニ総督(1896年～1905年在任)によるマダガスカル統治 2

<人種政策>

- a. 国内保護領を設定し、その長に土地の王などの有力者を起用。
- b. Menalambaの反乱の責任を問ひ、1896年10月15日Ranavalona III世女 王のオジにあたるRatsimamangaと内務大臣のRainandriampndryの二人を銃殺、1897年2月27日Ranavalona III世を島外追放。
- c. 1897年10月 学校教育におけるフランス語学習を義務化。

転換された政策

- a. イメリナ王国の夫役制度(fanompoana)を公共投資整備のために導入。
- b. フランス人教員にマダガスカル語学習を義務化・マダガスカル語夜間授業を開設。
- c. マダガスカル語検定制度導入。
- d. 1901年現地民法制度(justice indigène)施行。マダガスカル人は、フランス共和国市民(citoyen)ではなく臣民(sujet)として扱われ、フランス市民権を持つ人間とは異なる法律に基づいて異なる裁判所で裁かれる。マダガスカル臣民に適用された法の基本となったのは、1881年にイメリナ王国が公布した『305条法典』。
- E. 1902年 マダガスカル・アカデミー開設。

1909年 二代目総督Augeaur, フランス語会話能力などを条件に、マダガスカル人に対しフランス市民権を与える道を開く。これによってフランス市民権を取得したマダガスカル人の数は、1939年までにおよそ8000人。その一方、フランス人教員のマダガスカル語学習の義務化と夜間授業を廃止。

<マダガスカル人>意識の芽生え

1904年～1905年 日露戦争

1912年(明治45年・大正元年) 日露戦争における日本の勝利に触発され、Ravelojaona牧師が『日本と日本人』(Japon sy Japoney)と題する一連のマダガスカル語論説記事を発表する。

1913年 Ravelojaona牧師の記事に共鳴した人びとがタナナリヴで、「鉄・石・芽」(Vv Vato sy Sakelika 略称V.V.S.)と名付けたフリーメーソン結社を結成。

右図 Ravelojaona牧師の肖像写真 出典: Rambelosoa, *AndriamatoRAVELOJAONA Mpitandrina(1879-1956)*, 1958, p.1.



Atoa RAVELOJAONA, MPITANDRINA (1879 — 1956)

同牧師は1937年に、初のマダガスカル語による百科事典Boky Firaketana ny Fiteny sy ny Zavatra (Malagasy)の刊行をも手掛けている(～1973年終刊)。

第一次世界大戦とマダガスカル民族主義運動の胎動

1914年 第一次世界大戦(～1918年) この間マダガスカルからも45000名の<志願兵>がヨーロッパ戦線へと派遣され、4000名の戦死者を出す。

1915年 牛頭税の導入をめぐり南部一帯でSadiavaheの反乱が勃発。

12月 上記のV.V.S.が、「フランス人毒殺の謀議」を行った嫌疑により、フランス当局によって摘発される。この事件そのものは、第一次世界大戦中の民族主義運動を極度に警戒したフランス当局による捏造の性格が強い。

1917年 イメリナ王国最後の統治者Ranavalona III世、追放先のアルジェリアで死去。

配流先のアルジェリアにおけるラナヴァルナIII世と姪御

出典: Marie-France Barrier, *Ranavalona, dernière reine de Madagascar*, Paris: Editions Balland, 1996.



イメリナ王国最後の統治者ラナヴァルナIII世の望郷に対する念は強かったが、近親に囲まれ、穏やかな配流先での生活だったと言われる。

しかし、1938年の彼女の遺骨のマダガスカルへの帰還は、首都の住民にくど過去との記憶>を呼び起こすこととなった。

第一次世界大戦時のマダガスカル兵

出典: Jacque Razafindranaly, *Les soldats de la grande île, D'une guerre à l'autre 1895-1918*, 2000, Paris: L'Harmattan, p.XV.

出典: Jean Paulhan, *La vie est pleine de choses redoutables*, 1989, Seghers.



市民権獲得運動から独立運動へ

1920年 帰還兵でありまた社会主義者のJean Ralaimongoが、パリで<マダガスカル原住民にフランス市民権付与するためのフランス同盟>を結成。

1926年 <公共労働のための労役制度>(略称S.M.O.T.I.G)が、導入される。この制度は、第二次徴兵者を軍役ではなく、公共労働に投入するもの。

1927年 7月 Jean Ralaimongo、新聞L'Opinionを発刊。この新聞を中心に、マダガスカル臣民に対するフランス市民権付与の主張を喧伝すると共に、各地のフランス人入植者による土地奪奪問題などを告発する運動を展開。

1929年 5月13日タナナリヴにおいて、<独立>を求める最初の街頭行動が行われる。

1930年 前レバノン総督でアルジェリア系フランス人のLéon Caylaがマダガスカル総督として着任。Cayla総督はライミングたちを自宅軟禁処分するとともに、出版法を制定し、出版物への規制を強化。

1931年 フランス植民地省大臣パウル・レノーが「フランス臣民の全面的帰化はありえない」と公式に発言したことに対する反撥がマダガスカル民族主義者たちの間で広まり、これまでフランス市民権獲得運動に凝縮されてきたマダガスカル民族主義は、これ以降次第に「独立」へとその形を変えてゆくこととなった。

独立運動の盛衰

1936年 フランス本国の人民戦線政府が各植民地における政党結成を認めると同時に、労働組合の結成が始まる。

同年 上記の<公共労働のための労役制度>(S.M.O.T.I.G)が、廃止される。

8月12日マダガスカル地区共産党(P.C.R.M.)設立。

10月 製缶工場において労組による初めてのストライキ実施。

1936年を頂点に、一度<独立運動>は急速に衰退してゆく。その主たる原因は、世界を覆った経済恐慌であり、マダガスカルを含む植民地の経済も大きな打撃を受ける。その結果、<独立運動>の支援者であったり理解者であった都市の資本家や中産階級が、経済的な余裕を失い援助を撤回すると共に、先行きのはっきりしない<独立>よりもフランス市民権獲得の実利に走っていった。



1933年、女王最後の行われたラナヴァルナIII世の再埋葬式典
出典: Kaucas, *souvenirs et croquis de Madagascar*, 1969 Paris: Editions maritimes.

第二次世界大戦とマダガスカル

1938年 10月31日、追放先のアルジェリアで1917年に亡くなったイメリナ王国最後の女王 Ranavalona III世の遺骨が、タナナリヴに移送され、フランス総督府の手により女王宮内に再埋葬される。

1940年 6月 フランスがドイツに降伏。マダガスカルには、ヴィシー政権から総督が派遣される。

1942年 4月19日、ヴィシー政権と日本との間で、インドシナの防衛についての協定が成立。フランスが、日本軍がマダガスカルの全港を使用することを認める。

5月 7日 イギリス軍が、北部の軍港ディエゴスワレスを攻撃、三日間の戦闘の末これを占領する。

5月30日 日本海軍の潜水艦伊16号から発進した特殊潜行艇2隻が、ディエゴスワレス湾内に停泊中のイギリス海軍艦艇を魚雷攻撃。

9月17日、イギリス軍、北西部の港町マジュンガに上陸。総督府のあるタナナリヴおよびマダガスカル全島の軍事的制圧作戦を実施。

11月 6日 マダガスカルのフランス軍、南部のAmbalavao付近でイギリス軍に降伏。

12月14日 自由フランス代表De Gaulleとイギリス首相Anthony Edenとの間で、マダガスカルに対する自由フランスの権利を承認する調停が、締結される。

127

1947年蜂起への道 1

1943年 1月 マダガスカルにおけるフランス支配再構築の命を受けたフランス新総督Legentilhomme着任。このフランス支配の再来はマダガスカルの人びとの間に強い反発を招く。

1942年にくマダガスカル社会主義国民党(略称PANAMA)、1943年にく愛国青年同盟(略称JINA)、二つのフランス支配の武力による打倒を目指す秘密組織がタマタヴ州などで結成され、1946年10月に合同の協定を結ぶ。

1944年 1月30日~2月8日 コンゴのブラザヴィルで開催された連合国による戦後秩序の再構築を討議する会議において、フランスは第二次世界大戦後の世界秩序の再構築として、a. 各植民地からのフランス国民議会への代議士の派遣、b. 各植民地に後の憲法制定議会となる公選の代表会議を設置、c. しかるべき時がきたら、植民地の在住者全員にフランス市民権を付与、を提示。

1945年 10月 RavoahangyとRasetaの2名が、フランス第四共和国第一回憲法制定議会議員に、マダガスカル人議員として選出される。

128

1947年蜂起への道 2

1946年 2月 Raseta、Ravoahangy、Rabemananjaraたち7人が、フランス共同圏内におけるマダガスカルの独立を目指す<マダガスカル改革民主運動>(Mouvement Démocratique de La Renovation Malgache略称M.D.R.M)を結成。タナナリヴ州とタマタヴ州を中心に党員や支持者を得る。

6月 RavoahangyとRasetaの2名が、フランス第四共和国第二回憲法制定議会議員に選出される。

6月 <マダガスカル非継承者党>(Parti des Dshérités de Madagascar略称PA.DES.M.)が結成され、マジュンガ州を中心に党員と支持者を増やし、タナナリヴ州からタマタヴ州に支持者の多いM.D.R.M.党と対抗する。M.D.R.M.の党員や支持者たちは、このPA.DES.M.の結成と勢力拡大を、フランス当局による介入の策動とみなした。参加者の中には、後の大統領のPhilibert Tsiranana、第一共和国国家首班となったRatsimandravaが含まれていた。

10月 フランス第四共和国憲法採択。フランス海外領土の独立についての言及はなされず、マダガスカルはフランス海外領土として扱われる。

11月 フランス国民議会選挙。マダガスカル人側代議員としてM.D.R.M.のRaseta、Ravoahangy、Rabemananjaraの3人が選出される。新たに設けられた5つの州の州議会議員選挙が実施され、マジュンガ州を除く4州でM.D.R.M.が過半数の議席を獲得する。

129

1947年蜂起の範囲と組織図

地図上の太線は、反乱側の最大拡大範囲を示している。

□の囲い内は、1947年7月31日時点での反乱側の拠点の所在地および各地域の反乱の指導者名。

この蜂起に対しフランス側は、1947年4月23日にジブチより降下部隊1個中隊、セネガル歩兵1個中隊、5月20日と6月12日にセネガル歩兵2個大隊、6月18日外人部隊1個大隊、7月26日と8月8日にセネガル歩兵2個大隊、合計18000名を海外から派遣投入した。

1947年7月31日とは、このようにフランス側の動員兵力が整った時期であり、これ以降、主要都市や町の防衛に徹していたフランス当局が反撃に対し、農村部や山間部での掃討・鎮圧作戦に着手した。

出典: Jacques Tronchon, *L'insurrection malgache de 1947*, Paris: François Maspero, p.46.



130

1947年蜂起

1947年 3月29日夜半から30日未明 MoramangaとManakaraの町において、民衆が憲兵隊駐屯所などを襲撃。

反乱勃発から二週間ほどで主要な町は、フランス側によって掌握される。

8月 海外から18000名の増援部隊の到着が完了し、それまで都市部や鉄道・主要道路の防衛に徹していたフランス軍が反撃に移り、以降の一年半は、東海岸地方の農村部や山岳部における武装抵抗、間欠的な町の襲撃と掃討作戦に費やされる。

1947年10月 4日 タナナリヴで開催された大法廷においてMDRM党の国会議員のRavoahangyとRaseta以下7人に対し死刑、Rabemananjara以下4人に対し終身強制労働の判決が下される。

1948年 7月19日 タナナリヴ在住の裕福な企業家でフランス市民権を持ちながらも、マダガスカル革新民主運動MDRMおよび秘密組織マダガスカル社会主義国民党PANAMAの成員であったRakotondrabeが、反乱の「司令官」として逮捕・起訴され、銃殺される。

1949年 7月 死刑判決を受けたRavoahangyとRasetaは、終身刑に減刑される。

この蜂起のマダガスカル人死者の総数については、1万人代~10万人と人によって大きく異なる。これは、フランス軍の掃討作戦を恐れ森に逃げ込んだ人びとが飢えや病気で多数亡くなり、その数が正確に把握できないためである。フランス軍側の死者およそ350人(大半はセネガル兵やアルジェリア兵)、フランス人等の民間人の死者およそ200人である。

131

1947年蜂起画像 1

3月29日の蜂起側による夜襲で焼失したMoramangaの市街 出典: ANTA所蔵



132

1947年蜂起画像 2

3月29日の襲撃で射殺された蜂起参加者 出典: ANTA所蔵



1947年蜂起画像 3

蜂起側の用いた武器 出典: ANTA所蔵



134

1947年蜂起画像 4

蜂起側によって外された鉄路 出典: ANTA所蔵



135

1947年蜂起画像 5

蜂起側が破壊した橋を渡るフランス軍 出典: ANTA所蔵



136

1947年蜂起画像 6

フランス人入植者たちの間で組織された自警団 出典: ANTA所蔵



137

1947年蜂起画像 7

タナナリヴに到着したフランス軍増援部隊 出典: ANTA所蔵



138

1947年蜂起画像 8

東部農村地帯で掃討作戦中のフランス軍部隊 出典: ANTA所蔵



139

1947年蜂起画像 9

村長を尋問中のフランス人県知事 出典: ANTA所蔵



140

1947年蜂起画像 10

山岳地帯で掃討作戦中のフランス軍 出典: ANTA所蔵



141

1947年蜂起画像 11

逃避していた森の中から出てきた住民 出典: ANTA所蔵



142

1947年蜂起画像 12

逃避していた森の中から出てきた住民 出典: ANTA所蔵



143

1947年蜂起画像 13

蜂起勢力の恭順式典
槍をまとめてフランス当局者の到着を待つ住民 出典: ANTA所蔵



144

1947年蜂起画像 14

蜂起勢力の恭順式典

フランス当局者の前で槍を置く住民代表 出典:ANTA所蔵



1947年蜂起画像 15

蜂起勢力の恭順式典

左の白人男性は行政長官のMarcel de Coppet 出典:ANTA所蔵



1947年蜂起の背景

- 1.) 第二次大戦時のイギリス統治の経験。ほどなくして戻ってきたフランス統治への反発。
- 2.) 同じく白人>とは言い、フランス軍がイギリス軍に負けたことをマダガスカル人が目撃したこと。
- 3.) 武力による独立を目指す秘密組織の形成。
- 4.) 大戦中の1944年に実施されたコメの統制措置とそれに伴うコメ不足への反感。
- 5.) 1944年のコンゴのブラザヴィル会議において、フランスが第二次世界大戦後に各植民地に示した大幅な自治の可能性。
- 6.) 第四共和制憲法制定時における、マダガスカルを含む各植民地の<独立>ないし大幅な自治の可能性への期待およびその幻滅と失望。
- 7.) 大戦中のフランスによる待遇に不満を持つマダガスカル兵の世界各地からの帰還。
- 8.) フランスのテコ入れによる <マダガスカル非継承者党> (Parti des D sh rit s de Madagascar 略称PA.DES.M.)の結成と活動。

⇒フランスが独立派のMDRM勢力を一掃するため、蜂起をわざと見逃したと言うく陰謀史観が蜂起勃発時から現在まで存在する。この検証は困難であるが、フランスが蜂起当初からMDRMをその主体とみなし、MDRMの壊滅に向けて行動したこと自体は事実である。

1947年蜂起以降のマダガスカル

1956年 1月 後の初代大統領となるPhilibert Tsirananaが、フランス国民議会の議員に選出される。

1958年 6月 De Gaulleが政権の座に戻り、アルジェリア問題を背景に「フランス海外領土は、フランス共和国に留まるかあるいはフランス共同圏内の独立国となるかを選択できる。フランス共同圏の構成国は、自治国家でありまた自治の事柄について直接管理する」とする憲法第12条を議案に承認させる。

8月22日 De Gaulleがマダガスカルを訪れ、上記の条項をマダガスカルの代表者会議に提示する。

9月28日 「フランス共同圏内のマダガスカル国」の選択についての国民投票。賛成 113万票・反対 39万票・白票 38万票により、<独立>が優先される。

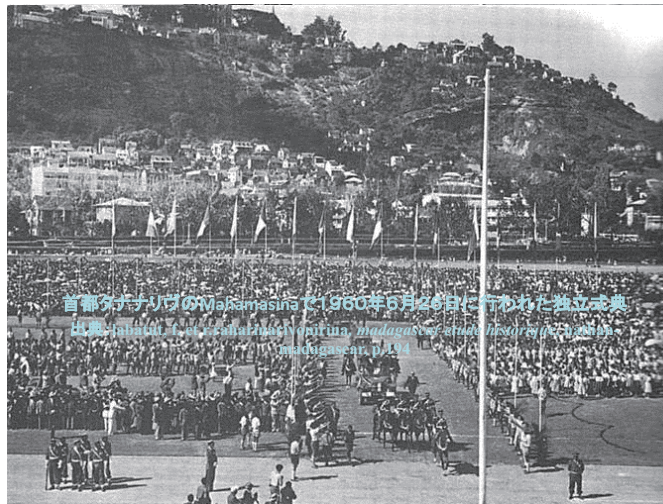
1958年 Monja Jaonaが、Toliaraで<マダガスカル独立国民運動党>(Mouvement National pour l'Ind pendance de Madagascar)、後の<マダガスカル人によるマダガスカル党>(Madagasikara Otronin'ny Malagasy 略称MONIMA)を結成する。結党時MONIMAは、即時完全独立を主張した。

1958年10月14日 1996年のフランス議会によるマダガスカル併合議決の廃止が宣言され、フランス共同圏内のマダガスカル自治共和国となる。

11月 <マダガスカル独立会議>(Antokon'ny Kongresin'ny Fahaleovantenan'i Madagasikara 略称AKFM)が結成され、党首Richard Andriananjato牧師を選出。AKFMは、民族主義とマルクス主義の理念が強く、第一共和制時代はタナナリヴ州の人びとを支持基盤に、PSDIに対抗する有力な野党であった。

1959年 4月29日 憲法制定議会が新憲法を採択。

12月 Philibert Tsirananaが、PADES.M党を母体に<民主社会党>(Parti Sociale D mocrate 略称PSD)を結成。

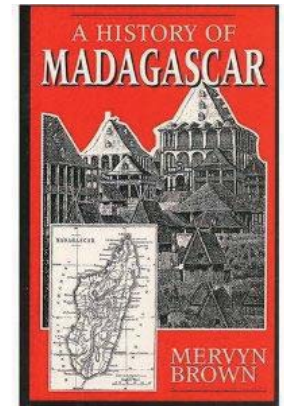


マダガスカル通史についての入門書

Mervyn Brown, A History of Madagascar, 2002, Markus Wiener Pub, 全408ページ(ペーパーバック版)

筆者は、元マダガスカル駐在英国大使。イギリスで19世紀のマダガスカルに関する史料を精査し、この本を書く。そのため、19世紀のイメリナ王国史が記述の中心を占めるが、英語も平易であり、図版も多く、マダガスカルの歴史や文化などを専門とするわけではない一般の人びとにも容易に理解できる記述となっている。マダガスカルの歴史の概要を知るには、一番お薦めの一冊。Amazon.comを通しても入手可。

残念ながら日本語では、お薦めの歴史書はまだない。



Imerina王国史への誘い

Gwyn Campbell, An Economic History of Imperial Madagascar, 1750-1895: The Rise and Fall of an Island Empire (African Studies), 2005/2008

目次

- Introduction;
- 1.The Traditional Economy, Industry and Agriculture;
- 2. The Traditional Economy, : Commerce;
- 3. Empire and the Adoption of Autarky;
- 4. Industry and Agriculture;
- 5. Labour;
- 6. Population;
- 7. The Trading Structure;
- 8. Foreign Trade;
- 9. The Slave Trade;
- 10. Transport and Communications;
- 11. Currency and Finance;
- 12. Madagascar in the Scramble for Indian Ocean Africa; Epilogue: The Rise and Fall of Imperial Madagascar; Appendices; Bibliography; Glossary; Index.

イメリナ王国史の幅広い範囲について、斬新な問題提起を行っている。また、参考文献はイメリナ王国史研究を志す人々にとっては、たいへん有用性が高い。

